

聖書の学び／2003年

桑 栄 一

- 1月12日(主の洗礼) 主の降誕が、神の国の相続人である新しいイスラエルとしての教会を造り上げて行く時代の到来を告げる出来事であったことを、より鮮明にしようとする現在の降誕節の意図に、私たちは注目したいと思います。御子は、飼葉桶に寝かされた乳飲み子のままで、降誕節が終わるとまた来年までそのまま記憶の外に“仕舞っておかれる”ような方ではないのだと、現在の典礼暦は主張しているのですから。御子イエスはヨルダン川でヨハネから洗礼を受けて、救い主としての公生涯を歩み始められたのでした。
- 1月19日(年間第2主日) 私たち現代のキリスト者は、自分のこれまでの信者としての人生を振り返ってみて、「見よ、神の小羊だ」「私たちはメシアに出会った」というような明確で確信に満ちたキリスト証言を聞いて育って来たでしょうか。ありのままの20世紀は、人々の口からそのような証言を聞くことの絶えて久しい時代でありました。……「どうぞお話しください。僕は聞いております。」(サム上3:10) 主は、共にミサをささげる私たち一人一人にも、このような信仰の姿勢を今朝求めておられます。
- 2月9日(年間第5主日) ヨブの語る自らの人生は、私たち自身の人生の現実そのままです。もし私たちがキリストの福音を聞かず、福音に与かって生きることをしていなかったら、ヨブの語る絶望と厭世は実に私たち自身のものであったことでしょう。しかし、キリストの福音によって私たちに神の国の希望が約束されたので、私たちはヨブの嘆きの言葉を神への希望の光の中で改めて聞くことが出来るのです。……今朝のヨブの嘆きの言葉を通して、神は私たち現代の教会にそのあるべき姿、「あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっている」(フィリ1:5) という姿へのひたすらな渴望を、呼び覚まそうとしておられます。
- 3月2日(年間第8主日) 私たち現代のキリスト者は、今一度司教団に受け継がれて来ている主キリストからの特別な委託に目を向け、その現代における権能の行使である第二バチカン公会議の公文書群を大切に考えなければなりません。古い服を脱ぎ、古い皮袋を捨てることは、現代の教会が司教団の推薦状、ひいては使徒たちの推薦状となるための重要な要素なのです。
- 3月16日(四旬節第2主日) 教会はその信条の中で、「われは一、聖、公、使徒継承の教会を信ず」と宣言しています。使徒継承とは、教会がいつの時代にも使徒たちから決して離れては存在し得ないということの意味です。……「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。“これはわたしの愛する子。これに聞け。”」(マタ9:7) 弟子たちはここで、律法と預言者の書(旧約聖書)に書かれている救済史の実現者イエス(ルカ24:44)に「聞け」との天からの声を聞きました。使徒たちが理解したように私たちも主イエス・キリストを理解し、使徒たちが伝えたように私たちもキリストの福音を学ぶことは、21世紀の教会にとっての最重要な課題なのです。
- 4月6日(四旬節第5主日) 教会にとって、キリストの福音からイエスの死と復活の事実を切り離すことは出来ません。その死と復活の光に照らして解釈されない(単なるナザレの)イエスの物語りや教えは、使徒たちが伝えた福音とは違うものです。一般の人々の中にある“イエスの宗教がイエスについての宗教に変質した”という異論への解答は、イエスの復活の後に最初の弟子たちが経験したことの中にあります。それは、イエスの死と復活の出来事は神の贖いの業であったという、復活節における神自らの啓示の行為によって起こった経験でした。使徒たちの福音宣教はそこから始まりました。
- 4月13日(受難の主日) 教会の一年の中で、受難の主日から復活の主日に至るいくつかのミサは、特別

に大切にされます。それは教会の宣教の中心が「十字架につけられたキリスト」(I コリ 2:21) であり、キリストの福音は正に十字架の福音だからです。

- 4月27日(復活節第2主日) 教会を生み出したものは使徒たちの宣教でありました。それは最初からイエス・キリストについての宣教であり、救いの福音でありました。現代の教会の宣教も、イエス・キリストの出来事についての使徒たちの証言の継続であって、その宣教に欠くことの出来ない要素は、その出来事の証人としての使徒たち自身であります。神は今も私たち現代の教会に、聖伝と聖書が伝える使徒たちの証言を通して語り続けておられます。
- 5月4日(復活節第3主日) 「人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでも」(I コリ 1:26) なかった初代教会の信者たちが十分に理解出来た聖書を、現代の私たちも普通の人間として読むことが出来ない訳はありません。私たちは“ろくに読みもしないで、無責任な仕方論ずる” 20世紀のキリスト教の論客たちの愚を繰り返さないために、各自が自分で読むことによって自ら聖書に精通したいものです。
- 5月25日(復活節第6主日) このように聖書が、特に福音書がミサの中で朗読されるとき、復活のキリストは今も御自分の体である現代の教会に向かって語り、使徒たちが聞いたのと同じことを私たちに聞かせてくださいます。ですから現代の信者である私たちも、福音書のイエスの言葉を最初に使徒たちが理解したように理解しなければなりません。ミサに集う私たちは単なる書物としての聖書を読んでいるのではなくて、復活して今生きておられる主イエス・キリストの御言葉を聞いているのです。
- 6月22日(キリストの聖体) ミサは神の国の饗宴の先取りであり(典礼憲章 8)、共にこれをささげている歴史の教会は、キリストの血による新しい契約によって一つに結ばれています。ミサは後のキリスト教会が創作した祭儀ではなくて、受肉された神の子イエスに起源する典礼であり、従って教会の誕生のときから、洗礼を受けて救われることとミサをささげる共同体に迎え入れられることとは一つに結びついていました。
- 6月29日(聖ペトロ聖パウロ使徒) ラッツィンガー枢機卿が今から2年ほど前の彼の論文「地方教会と普遍教会」で述べたことは、今日の祭日を私たちが理解する上で大いに役立つと思われるので、ここにその一部を紹介します。彼は「ローマ教会は、普遍的責任を有する特別な教会ではあるが、(それでもなお)一つの地方教会であり、普遍教会(そのもの)ではない」と述べて、私たち会衆一人一人が確かにキリスト者であることの根拠を次のように説明しています。……
- 7月6日(年間第14主日) 神の変わることをない生きた言葉(I ペト 1:23)であるキリストの福音を語る預言者は、どこにいらっしゃるのでしょうか。人間の言葉を語るだけの騒々しい指導者や活動家と、神のこぼれを語るために遣わされた預言者を見分けるのは、会衆一人一人の目と耳なのです。これを見分ける責任を神は会衆一人一人に求めておられます。私たちは(終末の)キリストの日に、騒々しい人間の言葉にかき消されてキリストの福音を聞けなかったと言い訳することは、決して許されないのです。
- 7月20日(年間第16主日) 教会における聖職位階にある人々の存在は、教会が根本的に復活のキリスト・イエスに依り頼む存在であるということ、共同体に示し続ける責任を担うためであり、従って彼らはキリストの体である共同体から離れては存在し得ない(リマ文書)。…… 教会における聖職位階にある人々の存在が重んじられるのは、イエス・キリストこそが、否イエス・キリストだけが教会の唯一の牧者であるということ、共同体に示すためであって、その務めが有効に機能しない場合には、キリスト者たちは「飼い主のいない羊のような有様」に陥ってしまいます。
- 8月24日(年間第21主日) 私たち一人一人は無力で罪深い者に過ぎませんが、教会の信仰、教会を形成させている(父なる神から与えられた)信仰に、自らもアーメンと唱えて参加しているのです。洗礼の秘跡を受けるとは、そういうことです。だから「わたしたちの罪ではなく教会の信仰を顧み(てください) ……」なのです。(教会に平和を願う祈り)
- 8月31日(年間第22主日) 世の中には数え切れない程たくさんの、キリスト教や聖書の解釈に関しての出

版物があります。20世紀のキリスト教会を振り返ると、多くの人々が自ら聖書を読み、自ら学ぶという基本的作業を省略して、手っとり早くそれらの解説書を盲目的に受け入れることによって“物知り顔”をして来たというのが、実情であったように思えます。…… 聖書の学問も、聖書の解釈も、それが私たち信者に「使徒たちから伝えられたこと」をより明確に伝える役割を果たすときにだけ、有益であると言うことが出来ます。すべての学問が私たちに益となる訳ではありません。

9月14日(十字架称讃) この天に上げられたキリストは、十字架につけられたキリスト(Ⅰコリ1:23)と同じ方であることを、私たちは忘れてはなりません。カトリックの多くの御聖堂で、祭壇上または祭壇の近くに置かれている磔刑の十字架像は、私たちのミサの本来の司式者である天上のキリストが、「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順で」(フィリ2:8) あった私たちの救い主であることを象徴しています。

10月5日(年間第27主日) 現代日本において、非常に高い離婚率と、男女とも(法的に)結婚しない人々の急激な増加は、旧来の結婚観の相対的無力化をもたらしました。特に旧来のキリスト教的倫理観の中で育った人々は、今やどう判断してよいのか全く分からなくなってしまっています。しかしそれは決して神も聖書も今や沈黙してしまった……、無力になって現代には通用しなくなったということではないのです。神はこの罪の世界に向かって語り続けておられます。…… 聖書は罪と死が入り込んだ現実の世への、イエス・キリストによる救いの福音を語っているのであって、……。

10月12日(年間第28主日) いつの時代にも人々は、自らの救いについて考えるとき、自分には何が足りないだろうかと思いめぐらして来ました。救われるためには何をしなければならぬのかと尋ねても、聖書はこの質問に直接的には答えてくれません。聖書が語るキリストの福音は、救いが私たち罪人への神の賜物であって、私たちが自らの力によって得るものではないということを、繰り返し説明しています。

11月2日(死者の日) カトリック教会の葬儀のための儀式書、緒言からの紹介…… 教会は葬儀において、何よりも復活信仰を表明し、キリストによって死者を神のみ手にゆだねる。……

11月16日(年間第33主日) 既に久しく人々は、福音を教会が使徒継承によって受け継いで来たそのままに受け入れるということを、時代錯誤のように思い込んで真面目に聖伝と聖書が伝えるものを学ぼうとしませんでした。そのような使徒継承への漠然とした不信が、結果として人々の福音への無知を生み、聖書から「主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇き」(アモ8:11) が、現代のキリスト教世界全体を覆うこととなりました。

11月23日(王であるキリスト) 典礼暦の最後の主日は、王であるキリストの祭日であります。教会は終末の日を実現する神の国の王として、やがて再臨されるイエス・キリストを宣言する祭日を、あらゆる時代を通して頑に守り続けて来ました。

12月21日(待降節第4主日) 「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです。」(ルカ1:45) エリサベトがマリアを賛美しているこのテキストは、初代教会の信仰の中での神の母マリアへの敬愛の一端を、私たちに教えてくれます。マリアは教養や地位の高い女ではなくて、身分の低いはしめめであります(1:48)。初代教会が目留めたのは、力ある神がこのマリアにされた偉大な業でありました(1:49)。

12月28日(聖家族) 「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、……」(Ⅰヨハ3:2) 私たちキリスト者が「神の子」であるのは、約束の形で言われているのであって、それは復活の日初めて完成するのです(ロマ8:23参照)。私たちは人ですが、その日には「御子に似た者」「キリストの兄弟」(ロマ8:29、ヘブ2:11-12参照)となるのです。